

5章：カリフのコイン 歴史教授におけるナラティブな枠組みという流通貨幣

The Caliph's Coin

The Currency of Narrative Frameworks in History Teaching

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

■著者情報（写真や経歴などはWEB上で発見できず）

著者名：Denis Shemilt

研究関心：教育評価、歴史教授と歴史学習を構成主義的アプローチで捉えること

経歴：元々は歴史や数学や物理を中等学校で教えていた。その後、the University of Leeds に移り、20年以上勤務。1986年からは Trinity and All Saints, a constituent college of the University of the School of Education における学部長を務めている。1974年に13-16歳を対象にした the Schools History Project の評価を担当し、1985年には the Cambridge A' Level History Project の共同ディレクターを担当している (Peter Lee とパートナーシップを結んでいる)。近年では、教育のマネジメントに時間をかけている。

■重要な用語

- ・ (in)coherent narrative 「一貫した（していない）ナラティブ」
- ・ narrative framework 「ナラティブの枠組み」
- ・ event-space 「事象空間」？
- ・ causal possibility 「因果的な可能性」、logical possibilities 「論理的な可能性」
- ・ monothetic 「単形質」、polythetic 「多形質」

■議題

- ①レベル1と2は歴史が苦手な生徒の分析をする際の指標として有用だが、特にナラティブが一貫しているかどうかをどう判定したら良いのか。また、どういう問いかけをすると一貫したナラティブを促進できるのか。
- ②レベル3の多次元性の区分は、他にどのようなものがありえるのか。また、それらはどのように相互に連結しうるのか。
- ③レベル4の多形質なナラティブの枠組みとは、歴史的思考の概念でいうと何に近いのか。

概要：

教育プロジェクトのデータをもとに13～18歳の歴史の捉え方の実態を紹介している。また、それらを4つのレベルに分け、発達させるべき段階として提示した上で、どのように歴史を教えるべきかを考察している。

※以降の節タイトルは池尻が便宜上作成したものです

■学校で教える歴史の目的の変遷 (pp.83-86)

- ①タイトルの「カリフのコイン」や「流通貨幣」は、
歴史を教えることの価値を喩えたものとして使われている
- ②学校で教える歴史は、その国のアイデンティティを高めることを期待される側面がある
- ③学校で教える歴史の目的や成果物は多くの国が参加して議論が行われてきた (p.84 中段)
- ④イギリスでは3点に焦点が当たっていた
 - ・学問としての実証的な歴史学の価値について
 - ・論理的でエビデンスベースな手段として生徒の歴史学の理解を発達させることについて
 - ・生徒は論理的で方法論的な装置の歴史的な問いを、過去の特定の断片やエピソードに
応用することはできていたが、過去全体に対してはそうでなかったことについて
- ⑤この時期、イギリスで以下のプロジェクトが実施され、著者は評価者として関わっていた
 - ・the Schools History Project (通称 SHP) (対象は13歳～16歳)
→学校での歴史の目的や本質を再考するために1972年に立ち上げられたプロジェクト
 - ・the Cambridge A' Level History Project (対象は16歳～18歳)

■生徒の歴史の捉え方の実態紹介 (pp.85-92)

- ①2つのプロジェクトを通じた、10代の歴史の捉え方の概要の紹介 (pp.85-86)
 - ・多くの10代にとって、過去は事象空間 (event-space) のように解釈されている
 - ・ほとんどの15歳は過去をマッピングできない
 - ・さらにほとんどの15歳は一貫したナラティブを作れない
 - ・ほぼ全ての15歳は1つの「最良の」ナラティブ以上を考えることはできない
- ②SHPにおける事前の評価の紹介 (pp.86-87)
 - ・ほとんどの15歳は役立つ歴史ナラティブの枠組みを発達させていなかった
 - ・多くの生徒の「事象空間」は一貫的でなく、順序や意味が欠けていた
 - ・15歳の女の子に事後インタビューした際の、医学史の事例が紹介されている
→この生徒は年代順の感覚をある程度持っており、タイムラインは構築できていたが、

現在や未来に組み入るような意味あるナラティブとして歴史を捉えたタイムラインを
解釈する気配はなかった

③SHP における事後の評価の紹介 (pp.87-88)

- ・ SHP はこの一貫しないナラティブに一定の良い効果を与えた
- ・ SHP に属した生徒は SHP に属さなかった生徒より一貫しないナラティブが約 45%低かった
- ・ SHP に属した生徒の多数において、少なくとも医学史については、意味があり、ナラティブとしての論理性を持ち、現在や未来と接続していた
- ・ ただし、これらのナラティブが「単形質」 (monothetic) だったのは課題点である
= これらのナラティブは合体させた複数の事実と同じ認識論的な状態として解釈されている
= 「何が変わるか」と「何が起こるか」を同じと思っている
= 歴史を一方通路とみなし、複数の過去や発達のラインを許さない

④単形質的な事象空間を解釈しているように見える生徒の特徴 (pp.89-90)

- ・ 歴史における変化を、連続性というよりは、行動や出来事の見出しのように捉えてしまう
→これは変化の間の出来事を授業で教えていないこととも関係している

⑤15 歳のほとんどは仮定法過去の文脈で何が起きたかを議論することはできたが、

因果的な可能性 (causal possibility) に触れる議論と、他の論理的な可能性 (logical possibilities) を許容する議論の違いを認識することはしばしば難しい (p.91)

⑥一方で、歴史の事象空間を「多形質」 (polythetic) で複雑なものとして解釈できる能力を見せた 10 代もいた (p.91)

- ・ しかし、因果的な可能性の特殊なケースとしての現実性を想像できた生徒は、SHP でも多くて 43%、SHP に属さない生徒だと多くても 19%にとどまった
- ・ SHP の 36%のナラティブな枠組みは多面的だったが、まだ「単形質」だった
- ・ これらのデータをもとにナラティブな枠組みの発達を示すことが重要

■ナラティブな枠組みの発達 (pp.93-100)

①レベル1：年代順の過去

- ・ 一般的に、このレベルの歴史は種類や精緻さの程度が異なるタイムラインを用いて教えられる
- ・ イギリスの場合は、国の歴史に焦点が当たり、比較的短いスパンで、ランドマークとなる出来事 (君主の死亡と継承など) を含んでいるタイムラインがよく用いられている
- ・ 年代順の過去のマップは一貫した歴史のナラティブの種を含んでいるにちがいない

②レベル2：一貫した歴史ナラティブ

- ・ 過去をマップとして描くのか、ストーリーとして描くのかという違いが存在する

- マップの場合は順番と関係性の定義がある
- ストーリーの場合は論理と意味を持っている
- ・これは「何が起きたか」と「何が進行中だったか」の違いと関連している
 - 歴史家は時系列に並べられるだけでなく、ナラティブの重要性に帰する意義ある説明を解釈している
- ・歴史を過去と区別でき、ナラティブの妥当性についての議論は単に真実か過去のイメージが迫真的かどうかを考えるものではないということに気づけた時だけ、10代は真に何が（歴史的に）議論されているのかを理解できるのである

③レベル3：多次元的なナラティブ

- ・価値あるナラティブの枠組みは少なくとも3つの次元で連結し合っている
 - 生産と人口の歴史の次元（経済、技術、人々）
 - 社会組織の形態の次元（社会構造、機関、政治）
 - 文化と知の歴史の次元（慣習、宗教、制度化された知識）

④レベル4：多形質的なナラティブの枠組み

- ・10代にとっては最も難しいステップ
- ・このナラティブの枠組みは history の解釈を可能にするだけでなく、高レベルな精緻化に達した知識の形態としての History の解釈を可能にする
- ・the Cambridge A' Level History Project に参加した16歳～18歳は、異なる主張をしている説明間で判決を下すことを狙い、一定の成功を収めている
 - しかしそれでもまだ「最も妥当な説明」よりも「ベストな正解」があると思う傾向にあった
- ・真に役立つものにするには、ナラティブの枠組みは順に並べられ、一貫しており、複雑で多次元であるだけでは不十分であり、多形質的で他のナラティブを許容するものでなければならないのである

⑤よりレベルの高い発達を促すためにすべきこと（pp.98-99）

- a) 歴史は「知識の型」として教えなければならない
- b) 歴史は人類全体の概観と教え、また繰り返し教えなければならない
- c) 歴史のシラバスは長期スパンの主題的な研究を含むべきである
- d) 異なる解決のスパン（20年、160年、700年など）で概要を分析させることが重要である
- e) ナラティブの枠組みと絡めながら、何のデータが重要かを同定しておくことが重要である